

# *Вестник № 61*

〒162-8644 東京都新宿区戸山 1-24-1

早稲田大学文学部露文コース室

tel: 03-5286-3740

e-mail: robun@list.waseda.jp

<https://dpt-bun-russia.w.waseda.jp/>

- 会員の近況より  
ロシアでの正教文化との触れ合い 牧元溪太  
公開講演会「19世紀ロシア思想史における信仰と理性：チャアダーエフからフォー  
ドロフまで」傍聴記 竹内ナターシャ
- 会員の新刊情報
- 早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い
- 学会だより
- 2024年度多元文化学会春期大会「源貴志先生のご業績を振り返る会」
- 『源貴志先生追悼文集』企画・制作のお知らせと原稿募集のご案内
- 2024年度春季公開講演会のお知らせ

## 会員の近況より

今号では、露文4年生の牧元溪太さんがロシア留学の体験記を、2023年度まで大学院博士課程に在籍していた竹内ナターシャさんが2024年1月20日に開催された秋季公開講演会の傍聴記を寄せて下さいました。

## ロシアでの正教文化との触れ合い

牧元溪太

私は昨年8月末からサンクトペテルブルク国立大学で学んでいます。私が通っている準備学部は、ワシリエフスキー島のネヴァ川沿いに位置しています。ちょうど1年前に爆弾テロがあったカフェから徒歩3分くらいの場所です。ネヴァ川沿いは歴史的な美しい建物が多く並んでいて、冬は風が強くてとても寒いですが、暖かい季節は散歩すると心地良いです。大学では、主にロシア語やロシアの歴史、文化などを学んでいます。大学側の組んだプログラムは週10コマで

文法、会話、歴史といった感じでバランスよく組まれていますが、自分に合った時間割を組むことも可能で、私のアメリカ人の友人は10コマ中8コマを文法の授業に変更しています。私のクラスは10人弱の少人数の授業になっています。今ペテルブルクにロシア語を学びに来ているのはほぼ中国人で日本人は私しかいない状態です。このような状況ですが、周りに日本人がいないのをロシア語だけに集中できる最高の機会というふうに前向きに捉えて日々勉強に励んでいます。また、たまに他の学部や大学の授業に行く機会を個人的に作ってそこでロシア人の友人を作っています。特に今私以外に日本人がいないので日本語を学んでいる学生と交流する機会は多いです。多くの面白い出会いがありましたが、今回は私の一番仲の良い正教徒の友人と教会の思い出について少し書こうと思います。

カーニングラード出身のアンゲリーナ・ミハイロヴナとは、ここに来て最初の週に大学で知り会いました。彼女の父親はロシア正教の長司祭で、家族全員教会で働いています。彼女自身大学入学以前は神学校に通い、今でも毎週欠かさず礼拝に行き、大齋期間の食事制限もしっかり遵守する敬虔な正教徒です。都市部に住む若者の中で彼女のような強い信仰心を持ったロシア人は現代ではなかなかいません。

私が教会に興味があると知ると彼女はまずスモレンスコエ墓地に私を連れて行きました。この墓地はワシリエフスキー島の中心に位置し、広大な敷地を持っています。夏は木々が生い茂り、秋は美しい紅葉、冬は雪景色を楽しむことができ、散歩にも最適です。ここには、ペテルブルクの聖人クセニヤ・ペテルブルクスカヤが建てた教会と彼女の墓があります。18世紀、彼女は夫が亡くなった後、自分の財産を全て貧しい人々に分け与え、毎日ひたすら神に祈りながら過ごし、多くの奇跡を起こしたと言い伝えられています。クセニヤの生き方は信者たちを魅了し、彼女のイコンは多くの奇跡を起こすと考えられているため、ペテルブルクだけでなくロシア全土で人気のある聖人のひとりに数えられます。アンゲリーナも一番好きな聖人だと言っていました。聖女クセニヤの墓には毎日多くの信者が訪れていますが、日曜日には彼女の棺の前で1人ずつ祈りを捧げるために長い行列ができます。私たちも一緒に列に並んで聖女クセニヤに祈りを捧げました。

冬の初め、アレクサンドル・ネフスキー大修道院の神学校で開催される正教関連の学会でアンゲリーナが発表するというので誘ってくれたので一緒に行きました。この歴史ある修道院は、ネフスキー通りの東端に位置し、ドストエフスキーやチャイコフスキー、イヴァン・シーシキンなど有名な芸術家や偉人のための墓地があります。また、トレジーニ父子の設計した教会があったり、露文科でロシア文化を学んできた身としてはかなり見どころの多い素晴らしい修道院です。この時、初めて神学校をちゃんと見学しましたが、食事の際みんなでお祈りしたり日本ではなかなか体験できない文化に触れることができ、楽しかったです。

年明けにはアンゲリーナの誘いでクリスマスの礼拝を見学するために彼女の出身地カーニングラードに行きました。この街はリトアニアとポーランドに挟まれた飛び地で、現在ペテルブルクからは飛行機かベラルーシ経由の鉄道で行くことができます。旧ドイツ領で哲学者カントの街でもあるカーニングラードは、ソ連建築だけでなくドイツ風の建築も多く残る美しい街でした。元々西方教会の聖堂だったものを正教会の聖堂に転用していたり、建築好きの私にとってはとても興味深い建物が多かったです。ビールや食べ物も美味しいです。年末年始、ペテルブルクは気温が-25℃まで下がる日もありとても寒かったです、カーニングラードは-5℃程

度とだいぶ快適な気候でした。

アンゲリーナの家族はこの街で一番大きな正教会の聖堂に勤めており、クリスマスの礼拝時にはそこに多くの信者が集まりました。新しいですがとても美しい教会です。多くのロシア人はクリスマスの礼拝はテレビで中継を見るだけで教会に行かないそうですが、実際に参加できたのは良い経験になりました。礼拝は夜中の0時ごろに始まり、3時ごろまで続き、それから教会の地下で小宴会がありました。その後、正教徒の友人の家のパーティーに招待してもらったり、これまでにないほど正教文化に深く触れることができたクリスマスでした。クリスマスの次の日、私はアンゲリーナの父親に教会の中を案内してもらい、正教に関する興味深い話や身の回りで起こったいろいろな奇跡などを聞かせてもらいました。教会の鐘塔からは街が一望でき、そこから見た美しい夕日は一生忘れ得ぬ思い出となるでしょう。

3月22日金曜日にはモスクワ郊外で140人以上が死亡するテロ事件が起こった影響で、ペテルブルクも土日の大衆イベントは全て中止になり、メトロの警備も厳戒態勢、何人かのロシア人の友人たちから3日間はショッピングモールや人の集まる場所には行かないほうがいいと連絡もありましたが、その時私はアンゲリーナと翌日モスコフスキー・プロスペクトにあるノヴォデヴィチ修道院の礼拝に行く約束がありました。街全体にかなり緊張感がある中で「もしかしたら安全じゃないかもしれないが、聖人に会いに行くのと約束したから私は行く」と彼女は言い、そのドストエフスキーやトルストイの小説の登場人物のような信仰心の強さに私は深く感動しました。このような信仰を持ち、ロシア文化への造詣の深いロシア人に出会えたことはロシア文学と教会に興味のある私にとって人生最大の幸運です。ロシア人風に多少大げさに言ってしまうと、天が彼女を私の元に遣わしたのでしょ。

ノヴォデヴィチ修道院というとモスクワにあるピョートル大帝の最初の妻が入った所が有名ですが、ペテルブルクのノヴォデヴィチ修道院の墓地にもネクラソフやチュッチェフなど多くの有名人が眠っています。私たちはここでダリヤ・シュルィギナ (**Дарья Александровна Шурьгина**) という聖人の墓にお参りに行きました。正確に言うとまだ聖人ではないのですが、アンゲリーナによると、すでに彼女のイコンが作られていて多くの奇跡を起こしているのもうしばらくしたら正式に聖人になるだろうとのこと。お金に困っていた時にダリアの墓の前で祈ったらお金がすぐに手に入ったとアンゲリーナが嬉しそうに話っていたのはとても印象深いです。

私は、元々教会を見たくてロシアに留学に来たので、今毎日教会を見学したり、休日の礼拝に参加したり、理想通りの留学生活を送っていてとても満足しています。もちろん今日本から送金できなかつたり生活する上で不便な点も多いですが、逆に自分のサバイバル力を試せたりメリットも多いです。この素晴らしい日々を後悔することは決してないでしょう。そして何より正教文化と触れ合う機会をたくさん作ってくれたアンゲリーナ・ミハイロヴナとの出会いに感謝しています。

(露語露文コース4年生)

**2023 年度秋季公開講演会**  
**福井祐生氏「19 世紀ロシア思想史における信仰と理性：  
チャアダーエフからフォードロフまで」傍聴記**

竹内ナターシャ

去る 2024 年 1 月 20 日、福井祐生氏の講演「19 世紀ロシア思想史における信仰と理性：チャアダーエフからフォードロフまで」を拝聴する機会を得た。筆者はロシア思想史については門外漢ではあるものの、「チャアダーエフとフォードロフ」と題された部分にのみ目を留めて、てっきりロシア正教等を軸としたロシアの過去と未来の事業に関する論であろうかと先入観を持っていたのだが、それはすぐに覆された。講演は、「ヨーロッパ思想史における科学と宗教」の対立あるいは調和についてという大きな前提から始まったからである。しかし、よくよく考えてみれば『哲学書簡』において、歴史に支えられた西洋とローマ・カトリックに比して過去の財産を持たぬロシアという構図を打ち出したチャアダーエフについて言及されると分かっている時点で、避けては通れない道でもあったといえよう。

まず、科学と宗教といえば我々は相対立するものと考えがちであるが、実際にはその関係は大きく分けて「対立・独立・対話・統合」という形態がある。ヨーロッパ思想史においては、17 世紀なら、科学は信仰を否定するどころか、創造主たる神の栄光に対する限りない賛美であるという考え方が、デカルト、パスカル、ベーコン、ガリレオ、ニュートン等の研究に見出すことが出来る。例えば、ニュートンの『プリンピキア』においては、世界は「神の感覚体」として理解されており、世界に遍在する創造主=能動者が物体に引力をもたらししているのだ。だが、18 世紀になると、科学は人間のためのものとなり、信仰は切り離され、実用的な分野と化す。この体現者たちはフランス啓蒙主義を担うヴォルテール、ディドロ、ダランベール、ドルバックらである。19 世紀には更に、宗教と科学は相容れぬ様相を見せてくる。筆者を含めた誰でも瞬時に思い浮かべられよう好例はダーウィンの『種の起源』だが、J.W.ドレイパー著『宗教と科学の闘争史』は早くも一年でロシア語に訳されて 1876 年に出版となったことは興味深い。いよいよ、視点をロシアに据えるのだから現在進行形で馴染みのある話が始まるはずだと筆者は安堵を覚えたのだが、ロシアにおける「信仰」と「理性」の問題を巡る歴史は思った以上に混沌としていた。というのも、ロシアにおいては宗教と科学が別々に分かれたれて認識されていたのではなく、「信仰と知」というより普遍的な段階から議論が交わされていたからであるらしい。正教会としては、本質的に教会は世界の外側にあり（『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャが修道院を出る流れが頭を過ったのは私だけであっただろうか？）、「科学によって語り得ぬ知の超越的次元は、教会における機密を通じた自然認識によって補完される必要がある」というものである。この認識は、ロシア正教独特の深遠な神秘性や、俗世からの良き隔絶感を成す根源と関わりがあるように筆者には思えるけれども、勿論それこそが問題なのである。「自然神学の欠如」は科学的認識に対して神秘的認識は無批判に優越させられてしまい、そもそも科学との関わりを追求する姿勢そのものが欠如しているのだ。だから、自ずと国力を高めるために「科学の発展を志向する国家」と、（国家からすれば）その一翼を担う教会の役割は矛盾をきたすことにもなる。ロシア思想史における信仰と理性の問題は、西欧派とスラヴ派の論争や初期スラヴ派と正教会の対立や社会

思想史の趨勢とも絡み合っており、実際のところ、連続講義を毎週受けて漸くその複雑な迷路の入り口を潜る準備ができるほどの難解さを感じざるを得なかった。

そのようなタイミングを見計らっていたかのように、福井氏はロシア思想史における重要人物の著作について興味深い紹介を始めてくれた。ロモノーソフといえば今更説明も不要のように思われる大人物ではあるけれども（筆者に至っては、彼が金星に大気があることを突き止めた科学者と知らなかった）、「信仰と理性」という観点からロモノーソフについて学んだことのある人は多くはないであろう。しかし、彼こそが宗教と科学の統合を試みたロシア思想史上の最初の人物なのだという。例えば、「二つの書物」の話などは新鮮であった。「神学者が『聖書』を通じて神の意志を明らかにするように、科学者は『自然』を通じて神の万能を明らかにする」という、まさに信仰と理性の調和の立場からのたとえをロモノーソフは行っており、天才は科学には神学的意義が内在しているため、宗教との対等な関係にあると考えていたのだ。「太陽上における金星の出現について」（1761）では、造物主が人類に与えた「二つの書物」は、「世界と聖書」であるとしており、前者には偉大さが、後者には恩寵が示されているというのだ。

いよいよチャアダーエフの登場である。チャアダーエフといえば、先述の通り、西欧派とスラヴ派の長い論争の火蓋を切る代表作『哲学書簡』（これも偶然ではなくヴォルテールを意識したタイトル）でのロシア批判の苛烈を極めるあまり狂人扱いされてしまった思想家である。国民を社会的に統合する働きをなさないロシア正教はヨーロッパ＝カトリシズム世界が構築した統一の原理からロシアを隔ててしまったとする内容であるが、当然ながら、これがチャアダーエフのすべてを説明する思想というわけではない。キリスト教においても社会における働きの大きいところをより評価したチャアダーエフであれば人間の英知に寄与するところの大きい物理学や天文学など経験科学への関心が並外れているのも当然と合点はいくのだが、少なくとも門外漢の筆者のそれまでの認識ではチャアダーエフといえば、西欧のキリスト教ネットワークに参加し損ねたロシアの先を憂うあまりに狂人扱いされた先鋭的な思想家であって、その全体像を捉えようと考えたことすらなかったのだから新鮮だった。さて、そのチャアダーエフ自身は西欧的合理主義者というよりは、合理性すらも神に至る道の中に見出していたようである。彼は、「自然諸科学が宗教的信仰に全く敵対しない」どころか、科学的進歩はキリスト教的宇宙発生論体系を裏付けるものとしてその調和を明言し、『断片集』において宗教も科学も神に至るのだとしている。とはいえ、ニュートンやロモノーソフとも異なって、寧ろチャアダーエフにとって、そもそも理性は信仰に反するものではないのだから、再統合といったほうが近いのかもしれない。

「信仰は最も力強く実り豊かな思考の一つである」即ち、思考なき信仰などというものはありえない。思想史におけるチャアダーエフの些か極端にも映るロシア批判とロシア・メシアニズムの思想の基盤には、実はこのように知と信仰は互いに不可分なばかりか、本質的に源を一にするものであるという基本的な姿勢があったのかもしれない。他に、「物質的自然と靈的本性の平行論」の話なども興味深かったのだが、こうして振り返ってみても冒頭からチャアダーエフまでだけでも深く掘り下げた話を聞きたくなるような内容があまりにも隙間なく続いているため、筆者は十分に理解する余裕を持つことができなかった。是非とも今回のテーマについて冒頭の「ロシアと西欧の歩みの相似と差異」、そしてロモノーソフからチャアダーエフまでくらいの範囲でゆっくりと一か所ずつ立ち止まりながら詳らかに聞くことができたならという感覚が残ってしまった。

ベリンスキーとゲルツェンへと話が移ると、ロシアにおけるヘーゲル受容というこれもまた一つの大きなテーマに違いないタームが現れたこともあり、筆者は些か緊張してしまったのだが、要は西欧派を代表する彼らが、「絶対者の実現」から「人間の自己実現」へと進歩するものとして歴史を捉えていたということである。絶対者よりも、歴史を動かす個人の実現こそが重要で、信仰と科学の調和は最早現実的ではない。だが、特に批判の矛先となったのは神そのものではなく、教会であった。キリストは真理を教えるが、階位制度に基づいた教会は不平等を肯定するものとして糾弾される。教えをただ教会の枠組みの中で額面通り守る人よりも、ベリンスキーによれば、「ヴォルテールというような人は、もちろん、あなたの東西両教会の司祭・主教・府主教・大司教というような人たちよりもさらに一層骨肉の髓までキリストの息子であったわけだった」のであり、その理論はドストエフスキーにも強い影響を与えたという。

次はキレーエフスキーそしてホミャコフ、つまりスラヴ派へと話は移り、キレーエフスキーがシェリング哲学をどのように評していたかが説明された。キレーエフスキーによれば、シェリングがヨーロッパ哲学の唯物論的・合理主義的・無神論的潮流への対抗手段として機能していたのであるが、それというのもシェリングの「生きている神の意志へと自らの特殊意志を一致させることが人間の最高の目標となる」という、「知と信仰の調和」と重なる思想と関わりがあったということらしい。「信仰する理性」というキレーエフスキーの考え方は、非常にチャアダーエフの思想と親和性が高い印象を受けた。理性的真理と啓示的真理を一致させることにキレーエフスキーは重要性を見出していた。

次は、ソロヴィヨフへと調和のテーマが引き継がれる。ソロヴィヨフは、信仰と理性を統合する哲学という考えにおいてキレーエフスキーと近い。しかし、ソロヴィヨフはなによりも「全的知識／自由神智学」を目指したのであって、実証主義、ヘーゲル主義、信仰主義それぞれの一面性を克服することのできる知の結果としての哲学体系を構築しようとしたという点で革新的である。

そして、いよいよ講演の締め括りを飾るフォードロフの話となるが、ここで何よりも意識しておかなくてはならなかったのは、スラヴ派もソロヴィヨフも、「信仰と理性の関係の形式に関する方法論的反省に先行する形而上学的・認識論的事実」を扱ったという点だ。そこが、フォードロフとの大きな違いなのである。フォードロフは司書でありながら宗教思想家でもあるという変わった肩書の持ち主で、「共同事業」や「祖先の復活」といった具体性がその思想の大きな特色で、ロシア・コスミズムの中心的人物である。具体的で科学的な実現に重きを置くフォードロフは、スラヴ派の具体性の欠如を「キレーエフスキーにおける信仰と理性の和解は単なる机上の空論である」「これはわざの欠如した死んだ信仰であり、実践的ではない単なる理論理性に過ぎない」などと批判した。では、フォードロフ自身はどのような具体性を提示していたのかといえれば、その代表的なものは〈聖堂＝学校＝博物館〉のネットワークによる信仰と知の統合のプロジェクトである。これはあくまでも未来のためのプロジェクトに違いないのだが、そのためには過去を司る物品や記憶を保存、再建・蘇生することが不可欠なのである。フォードロフはキレーエフスキーやホミャコフの主題を継承しながらも、信仰と知を統合する独自の哲学＝プロジェクトを構想したのだが、「多数における一致」を実現するには〈学校＝聖堂＝博物館〉が重要な役割を果たすのであり、ここで「信仰と知」が密接に結びつくのは自明といえるかもしれない。

重要な点はまだまだ他にもあったのだが、講演会で辿った道筋をダイジェストで提示するこ

とは困難を極める。一つ一つの景色に見惚れる暇もなく駆け足で大陸を横断したような余韻が残る情報量ではあったが、ロシア思想史の大海に流れ込む重要な支流の一つを見せて頂いた、大変貴重な機会であった。

## 2024年上半期会員の最新刊情報（2024年5月10日調べ）

- 生熊源一著『ロシア宇宙芸術：宇宙イメージからみるロシア美術史』水声社（2024/05）  
五木寛之著『人生のレシピ 本を友とする生き方』NHK出版（2024/1）  
五木寛之著『錆びない生き方』毎日新聞社出版（2024/2）  
五木寛之著『五木寛之セレクションⅢ【異国ロマンス集】』東京書籍（2024/3）  
五木寛之著『人生のレシピ 異国文化の楽しみ方・味わい方』NHK出版（2024/4）  
五木寛之著『五木寛之セレクションⅣ【サスペンス小説集】』東京書籍（2024/4）  
五木寛之『こころの散歩』新潮社（2024/5）  
乗松亨平監訳、上田洋子、平松潤奈、小俣智史訳、ボリス・グロイス著『ロシア宇宙主義』河出書房新社（2024/04）  
澤直哉著『架空線』港の人（2023/10）  
東海林さだお著『カレーライスの丸かじり』朝日新聞社出版、丸かじりシリーズ 47（2024/1）  
東海林さだお著『大盛り！さだおの丸かじり とりあえず麺で』文春文庫（2024/2）  
高柳聡子著『埃だらけのすももを売ればよい：ロシア銀の時代の女性詩人たち』書肆侃侃房（2024/2）  
戸田裕之訳、ジェフリー・アーチャー著『遙かなる未踏峰』ハーバーコリンズ・ジャパン（2024/4）  
松村瑞子、井上幸義、東出朋著『日本人とロシア人にとってのポライトネス・インポライトネス（丁寧さ・失礼さ）』花書院（2024/1）  
松谷さやか訳、ウラジーミル・グロツェル、ゲンナジー・スネギリョフ著『ちいさなりょうしタギカーク：アジア・エスキモーの昔話』福音館書店（2024/4）  
松谷さやか訳、オリガ・ヤクトーヴィチ著『かものむすめ』福音館書店（2024/4）  
工藤純子著、佐々木メエ絵、村山久美子監修『リトル☆バレリーナ 夢色ときめきストーリー☆3つ』Gakken（2024/3）

\* 著書を上梓された会員の方は、ぜひ編集部までご一報ください \*

## 早大ロシア文学会維持会員制度についてのお願い

早大ロシア文学会の「維持会員制度」は、すでに多くの方々からのあたたかいご支援を頂戴しております。おかげさまで、毎年『ロシア文化研究』を発行することができております。『ロシア文化研究』発行の他にも、ニューズレター「ヴェスチ」の発行・送付、春季公開講演

会の諸費用等にも、皆様より寄せられた会費が充てられております。

この制度は、会員の方々から広く「維持会員」を募り、維持会員になって頂いた方には、その年度の『ロシア文化研究』を年度末の発行に際して1冊お送りするという制度です。学会誌・ニューズレターの発行、講演会の諸費用等は大学からの補助だけではまかないきれません。会員の皆様には、本学会が担い続けている、日本のロシア文化研究の中心的役割をご理解のうえ、ぜひともご支援をお願い申し上げる次第です。一人でも多くの会員の方々からご支援を賜りますよう、お願いを申し上げます。維持会員になっていただけます方は、以下の要領にてご送金くだされば幸いです。

- (1) 年会費は1年につき2,000円となります。
- (2) 維持会員費納入には、同封の郵便振替用紙をご利用ください（口座番号 00160-7-87172 加入者名 早稲田大学ロシア文学会）。差出人欄には、住所と氏名だけでなく、郵便番号と電話番号も必ずお書きください。
- (3) 複数年のお振込みをいただいた方には、自動的にその年度発行分以下、『ロシア文化研究』を、発行され次第、順次、送本申し上げます。
- (4) 『ロシア文化研究』は、年度末に発行されます。従いまして、前年度の『ロシア文化研究』をご希望の方は、振替用紙の通信欄に、その旨、お書き添えください。

少しでも多くの皆様のご協力とご支援を重ねてお願い申し上げます。

## 学会だより

- 2024年3月に文学部ロシア語ロシア文学コースから15名が卒業しました（うち9月卒業者1名）。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程の修了者は3名でした。
- 2024年度の文学部ロシア語ロシア文学コースへの進級者は8名でした。文学研究科ロシア語ロシア文化コース修士課程への入学者は1名、博士後期課程への入学者は2名でした。
- 2024年度春季公開講演会・総会が6月15日（土）に催されます。詳しい日時・場所につきましては、10頁をご覧ください。
- 早稲田大学多元文化学会主催で、6月29日（土）に「源貴志先生のご業績を振り返る会」が開催されます。早稲田大学ロシア文学会は共催いたします。詳しい日時・場所につきましては、次頁のご案内をご覧ください。

**\* ヴェスチに情報掲載を希望される方は、編集部まで原稿をお寄せください \***

## 2024 年度多元文化学会春期大会 源貴志先生のご業績を振り返る会

日時：2024 年 6 月 29 日(土)14:00～16:30

場所：早稲田大学戸山キャンパス 3 階第一会議室

主催：早稲田大学多元文化学会 共催：早稲田大学ロシア文学会

タイムテーブル：

14:00～14:10 開会の挨拶 多元主任：垣内景子（司会 中澤達哉）

14:10～14:40 澤田和彦（埼玉大学名誉教授）

14:40～15:10 南平かおり（早稲田大学講師）

15:10～15:20 休憩

15:20～15:30 多元教員から① 小田島恒志

15:30～15:40 多元教員から② 井上文則

15:40～15:50 多元旧源ゼミ学生から 笠間菜緒

15:50～16:00 露文教員から① 坂庭淳史（メッセージ代読）

16:00～16:10 露文教員から② 三浦清美

16:10～16:20 露文旧源ゼミ院生から 三浦領哉

16:20～16:30 フロアから

16:30 終了

### 『源貴志先生追悼文集』企画・制作のお知らせと原稿募集のご案内

昨年 12 月 15 日、長年にわたり露文で教鞭を取られた源貴志教授がご逝去されました。あまりに突然の知らせに私たち学生は茫然とするほかなく、告別式で源先生とのお別れを終えて数か月がたった今も、先生を失ったことで心に空いた穴を埋められずにいます。

こうした中で、学生間で話し合った結果、幅広い年代の学生・卒業生と触れあってこられた源先生の研究・教育の場におけるお姿を記憶に残し、お世話になった私たちの感謝の印としたいと考え、源先生の追悼文集を企画・制作することとなりました。つきましては、露文の卒業生のみなさまより、文集に掲載する原稿を募集したく存じます。源先生に感謝の意を表する追悼文、あるいは在学時代や卒業後の源先生との思い出などを綴った回想をご寄稿いただければ幸いです。追悼文集の企画・制作の趣旨に賛同し、ご協力いただける方は、下記の要領にしたがって執筆のご希望をお寄せください。

- (1) 6 月 30 日（日）24 時までに、以下のメールアドレスに執筆を希望する旨をお送りください。その際、氏名（旧姓等を含む）、卒業年度、連絡先（メールアドレスや電話番号等）をお書き添えください。

【源貴志先生追悼文集編集委員会：minamotosensei@list.waseda.jp】

(2) 原稿の種類と字数につきまして、以下の A～D の中から一つを選び、(1) の執筆希望と合わせてお伝えください。

【回想】 A: 2000 字以内 B: 1000 字程度

【追悼文】 C: 500 字程度 D: 200 字程度

執筆をご希望いただいた方には、7月上旬頃に、お送りいただいたメールアドレスへ正式な原稿のご依頼をお送りいたします。ご連絡を心よりお待ちしております。

なお、本企画・制作に関して何かご質問等ございましたら、上記の源貴志先生追悼文集編集委員会のメールアドレスにお問い合わせください。

(源貴志先生追悼文集編集委員会一同)

## 2024 年度春季公開講演会のお知らせ

早稲田大学ロシア文学会では、2024 年 6 月 15 日（土）に 2024 年度春季公開講演会を開催いたします。今回は、早稲田大学文学学術院講師（任期付）の斎藤慶子氏に「労音によるロシアバレエ普及：エリート文化の大衆化」と題してご講演いただきます。

なお、総会は講演会終了後に引き続き執り行います。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

### ●講演会

日時 2024 年 6 月 15 日（土） 15 時 30 分から（17 時終了予定）

会場 早稲田大学戸山キャンパス 34 号館 151 教室

\*一般、学生の皆様のご来場を歓迎いたします。

「労音によるロシアバレエ普及：エリート文化の大衆化」

斎藤慶子氏（早稲田大学文学学術院講師（任期付））

### ●総会

会場 講演会終了後、同じ 34 号館 151 教室にて開催します。